

フィリピンの越し方ホセ・リサルとマルコス大統領

2021年12月14日の読売新聞国際版にフィリピン大統領選に関する記事が掲載された。かつて同国に独裁的な体制を敷き君臨していたマルコス大統領の子息が立候補するとの報道である。この記事きっかけに父君のマルコス大統領が権勢を揮っていた時代に首都マニラを2度訪れ、以来すでに半世紀が過ぎたがフィリピンの越し方を振り返ってみた。

1970年代の日本経済は、競争の激しい国際社会から高い関税障壁や様々な政策によって防護され、企業はいわば温室育ちの中で成長を遂げていったのである。

本来自由競争であるべき商取引なのに、日本は門戸を閉ざしているのはけしからんという諸外国からの批判の声は日増しに高まっていった。そして遂には非難の声に抗しきれず、官民ともに経済の鎖国状態にあった日本の門戸をようやく開き、先進諸国から強い要求のある貿易や資本に関する自由化へ向けて大きく舵をきることにしたのである。



生産性の船出港風景

企業は自由化対応には、まず人の国際化が重要だと考えた。経営トップ層、ミドル、さらには若手へと企業が国際化に対応していくための人材育成にいずれの企業も熱心であった。

産業界の抱える世界に通用する人材育成という切実な課題に対し日本生産性本部の編成する「生産性の船」は、わが国産業界が求める“国際人養成”のニーズに沿ったプログラムを準備し船出したのである。横浜港の大棧

橋に横付けされた「生産性の船」は450名の参加者がデッキに勢ぞろいした。企業関係者、家族、労組など見送りの人々で棧橋は埋め尽くされ五色のテープが飛びかった。東京消防庁のブラスバンドが蛍の光を奏でる中、歓呼の聲に送られ船は岸壁を離れた。

生産性の船は課長・係長クラスを中心に国際社会とはどういう世界なのか社員に実体験させねばならないという企業の強い要請を受け編成されていた。洋上にある時は国際化に関わる座学研修が朝から夜遅くまで続けられ、寄港地に到着すると現地企業や市内視察を精力的にこなした。コースは香港・マニラさらにはシンガポール、後年は上海、大連、釜山などにも寄港している。

当初備船した船は日本の見本市船として使用していた貨客船で、一室に20人も詰め込み、冷房も効かない暑熱地獄で口さがない人は、これは奴隷船だと悪態をついた。その後間もなくイギリス国籍のアマゾン河で使用していた喫水の浅い客船コーラル・プリンセス号を備船した。

船内研修で国際化をどのように考えるかを議論しているとき、日産自動車から参加の職長は満座の中で「日産は国際社会とっている。わが社はすでに国際社会を視野に入れた取り組みを全社で開始している。当社は国際化の“化”の字をすではずして議論している。との発言に全国から参集した各社の精鋭たちの中から「うお・・・」というため息とも賞賛ともつかぬどよめきが起こった。450名の参加者で渡航経験を持つものはほんの数名である。今向かっているフィリピンを訪れた人は皆無であった。喫水の浅い河船ゆえ波浪のきついバシー海峡にさしかかると船酔いが続出し

研修にも差しさわりの出る始末であった。ようやく波静かなマニラ港に接岸し、早速市内見学が始まった。

上陸して案内されたのは緑の芝生の敷きつめられた戦没者墓地、ついでマニラの日抜き通りマカティ地区へ、街中は華美に装飾を施したジプニーと呼ばれる改造自動車が道路をうめて走りまわっている。



驚いたことに立ち寄るレストランも土産店にも銃を持ったガードマンが入り口を厳しく警備する姿を目にして、安全天国日本でぬくぬくしていた日本人に大なるショックを与えた。マニラ湾を望むレンガの塀に覆われた「ホセ・リサル公園」へやってきた。ガイドの説明を聞きながら日本ともかかわりがあるというが、ホセ・リサルについて知る人は誰もいなかった。

マニラ市内に行く

ホセ・リサル（1861年～1896年）フィリピンの革命家で国民的英雄。ルソン島で生まれる。彼の一族は中国人とフィリピン人の混血の家系。リサルはスペインのマドリッドへ留学する。1882年に日本とアメリカを経由してヨーロッパへおもむくが、リサルは横浜に到着し日本人女性と親しくなり2か月間日本に滞在し見聞を広めた。横浜を離れサンフランシスコへ向かう船旅で、自由民権運動の壮士で、のちに衆議院議員となる末広鉄腸と懇意になりロンドンまで一緒する。



都内日比谷公園にあるホセ・リサル銅像

リサルは欧州から故郷フィリピンへの帰国を望むが、彼の植民地主義を危険な思想として帰国を阻まれる。だが望郷の念やみがたく帰国はしてみたが逮捕されミンダナオ島へ流刑される。

1890年流刑期を終え、スペイン軍艦の医師として乗り込むもバルセロナで逮捕され、マニラへ護送される。そして軍法会議にかけられ1896年、35歳の若さで銃殺刑に処せられた。

リサルが処刑された地は、現在リサル公園と名付けられ終日衛兵に見守られている。公園の一方にあるサン



マニラにあるリサル記念館

チャゴ要塞跡にはリサル記念館があり、彼に関する遺品などが展示されている。因みにわず

か2か月の日本滞

在であったが都内日比谷公園には、フィリピンの英雄ホセ・リサルの記念像が建っている。翌日フィリピンの企業から数名の人たちが乗船してきた。生産性向上をテーマに、日比で互いに議論しようという企画である。日本側の参加者から、超一流と噂に高いマニラホテルのディナーを

例に引き、「昨夕食事が終わるまで何と2時間半を要し、予定していたショッピングの時間が無くなってしまった。スピーディなサービスをすれば食事時間が短縮され、お客の回転率が上がり収益に貢献出来よう。ホテルは生産性を高める努力をもっとすべきではないか」と声高に意見を述べた。ところが双方の議論がかみ合わないのである。フィリッピン側の主張は「マニラホテルの様な格式の有る素晴らし席で食事をするなら、なぜ早く食べねばならないのか、時間をかけて十分楽しめばいいではないか。食事を急がせられたならクレームをつけるべきだが、遅いと文句をつけるのはお門違いではないか」。指摘されてみると時間をかけて食事を楽しむという風習が日本には欠けていると日本側の参加者から反省の意見が出て一同苦笑いとなった。



マニラホテル

バスの車窓からみるマニラの市内は、物質的には決して豊かとはいえない風景であった。目の前の豪華な真っ白に輝く船体を見て、貧しさとのギャップに複雑なおもいを抱き釈然としなかったものである。

停泊しているコーラル・プリンセス号の対面には当時権勢を誇っていたマルコス大統領の豪華なクルーザーが係留されていた。これを見た人たちは日本の首相でクルーザーを持っている人は皆無だ、それにしてもフィリッピンの貧富の差は大き過ぎはしないかと喧々諤々の議論で湧きたった。



マルコス大統領所有の大型クルーザー

フェルディナンド・マルコス（1917年～1989年）フィリッピン共和国第10代大統領。アメリカの植民地時代のフィリッピンに生まれる。父親は弁護士で後国会議員となる。マルコスは頭脳明晰で司法試験はトップであった。大統領になってから、米の自給率を高め、失業率を減少させ、道路、学校、病院などの建設に取り組むなど同国の経済発展に大きく貢献した。マルコスは独裁者として20年間も政権の座にあったが共産主義を嫌い、アメリカの歴代の大統領と親密な関係を作り上げてきた親米派であった。だが次第に独裁色を強め強権を振るうようになって国民から批判を受け政情は不安定になっていく。彼は世相を抑えこむため9年間の長きにわたりフィリッピンを戒厳令下に置いた。独裁体制が進むに従い汚職が蔓延し当然のことながら経済は停滞し当時の失業率は12,55%まで増大した。そしてマルコスの贅沢な暮らし向きがしばしば報じられ、とりわけイメルダマルコス大統領夫人の贅沢な暮らしは批判を浴びた。1986年、遂にアメリカハワイへ亡命する。主の去ったマラカニアン宮殿の夫妻の暮らし向きを報じるニュース映像がテレビで流れ、イメルダ夫人の千足を超える靴の山、900近いハンドバックが映し出され衆人を唾然とさせた。マルコスは1989年、亡命先のハワイホノルルで病没する。その後イメルダ夫人はフィリッピンに戻り活動を続け、2021年12月現在92歳になるも健在である。

因みにフィリピンのマルコス以降の大統領はコラソン・アキノ、フィデル・ラモス、ジョセフ・エストラダ、グロリア・マカパガル・アロヨ、ベニグノ・アキノ3世、ロドリゴ・ドゥテルテと続く。次の大統領選は2022年5月に行われる。

余談) 船上でリサールと息のあった日本人の衆議院議員末広鉄腸の孫の長男、末広恭雄は水産学の権威で東大教授。本棚には末広恭雄博士の著書、魚と伝説、魚の国案内、とっておきの魚の話、新魚ものがたりなどが並んでいる。博士は現上皇様に魚学についてご進講し、2021年に閉館された京急油壺マリンパーク水族館長なども務めた。ついでにもう一つ、生産性の船として傭船したコーラル・プリンセス号がフィリピン港に係留されているのを発見した。ガイドに尋ねたところフィリピンに買い取られ賭博船として就航しているそう。夕刻着飾った人々を乗せ公海上に出て、公海上で賭博を開帳し翌朝マニラ港に帰港するいわゆる「バクチ船」に変身していたのである。